

自然と対峙 「未知」を開く

1面から続く

カンリガルボ山群の未踏峰ロブチンにアタックしたのは、兵庫県豊岡農業改良普及センター職員の大崎雅則(36)。「朝来市和田山町」と、神戸大学大学院生の近藤昂一郎(24)「神戸市灘区」だった。

近藤は長野県に生まれ、神戸大で本格的に登山を始め、ロブチン挑戦の計画を聞いて好奇心に駆られ、真っ先に手を挙げた。神戸大登山隊長の井上達男から見れば経験も技術もまだまだ未熟だが、その若さにアタック隊としての「突破力」を期待した。

2人は午前8時にキャンプを出発。海外遠征は初めての矢崎がリードし、近藤が続く。しかし出発から約7時間、矢崎は頂上を目前に高度障害に陥り、近藤と前後を交代する。薄れる意識。身体は鉛のように重く、動かない。視界は緑がかった。

「下りよう」と言う矢崎に、近藤は「もうすぐです。とりあえずここまで来てください!」と返した。矢崎の視界はさらにかすみ、気力だけで足を運ぶ。約10分後、「着きました」という近藤の声で頂に立ったことを知った。

「もう登らなくていいんだ」と思った矢崎。それほどに限界だった。GPS(衛星利用測位システム)で標高を測ると、想定された数値より100mも高い。初登頂もたらした新発見だった。

矢崎は言う。「人間の力があるに及ばないところで、ちっぽけな人間が頂上に立つ。自然と自分自身と対峙し、その先に達成感がある」

近藤は「あんなに濃厚な青い空を見たことがなかった。天に向かって歩いているみたいだった」。途中、思わず景色に見とれた。「山頂に向かって鳥が飛んでいた。人がこ

実際の標高は100m高かった

① 学術登山の伝統

んなに苦労して見ることができた景色を、いともたやすく見ることができた鳥がうらやましかった」

そんな2人を、残る隊員4人がサポートし、頂上まで「押し上げた」。近藤は「次に未踏峰に挑戦することがあれば、今度は自分が『サポート隊』に回る」と話す。



近藤昂一郎さん

神戸大名誉教授の平井正一(79)「京都市」は、長く兵庫の学術登山をリードしてきた。甲南大では2000年まで理学部の教壇に立った。神戸大山岳会の前会長、甲南山岳会の名誉会員として後進の指導に当たる。

出身は京都大学山岳部。26歳のとき、ヒマラヤ西部の未踏峰チヨゴリザワ(6548m)を制した。

「人類で初めてそのピークに立った。未知を開く感激に足が震え、それが私の一生を決めた。未知は人類にとって大きな宿題。開けば人類の知識が増え、財産になる」

1962年にカラコルム山脈のサルトロカンリ、76年に同山脈のシェルピカンリ、86年にチベット南部のクーラカンリにも挑んだ。

シェルピカンリはまったくルートが分からず、クーラカンリは資料写真1枚しかなかった。そんな強者の平井だが、一方で「未知も自然もすべて怖い」と打ち明ける。

インドとの国境未確定地域に近く、外国人の立ち入りが制限された「秘境」。平井は登山許可を取るため中国国内に人脈を築き、政治情勢にア

いつまで続くかわからない嵐、突然の雪崩。「危険がない冒険なんてない。でも、自然への勘を働かせ、克服する。大事なものは、警告をレシーフできるかどうか。それに気づくには、自然に対して謙虚になること」

神戸大登山隊長として03年に挑んだカンリガルボ山群・ルオニイの中途断念。それから6年。ロブチン登頂成功を誰よりも喜んだ。そもそも、平井がカンリガルボ山群をターゲットに定めたのは、クーラカンリを制した直後の86年にさかのぼる。

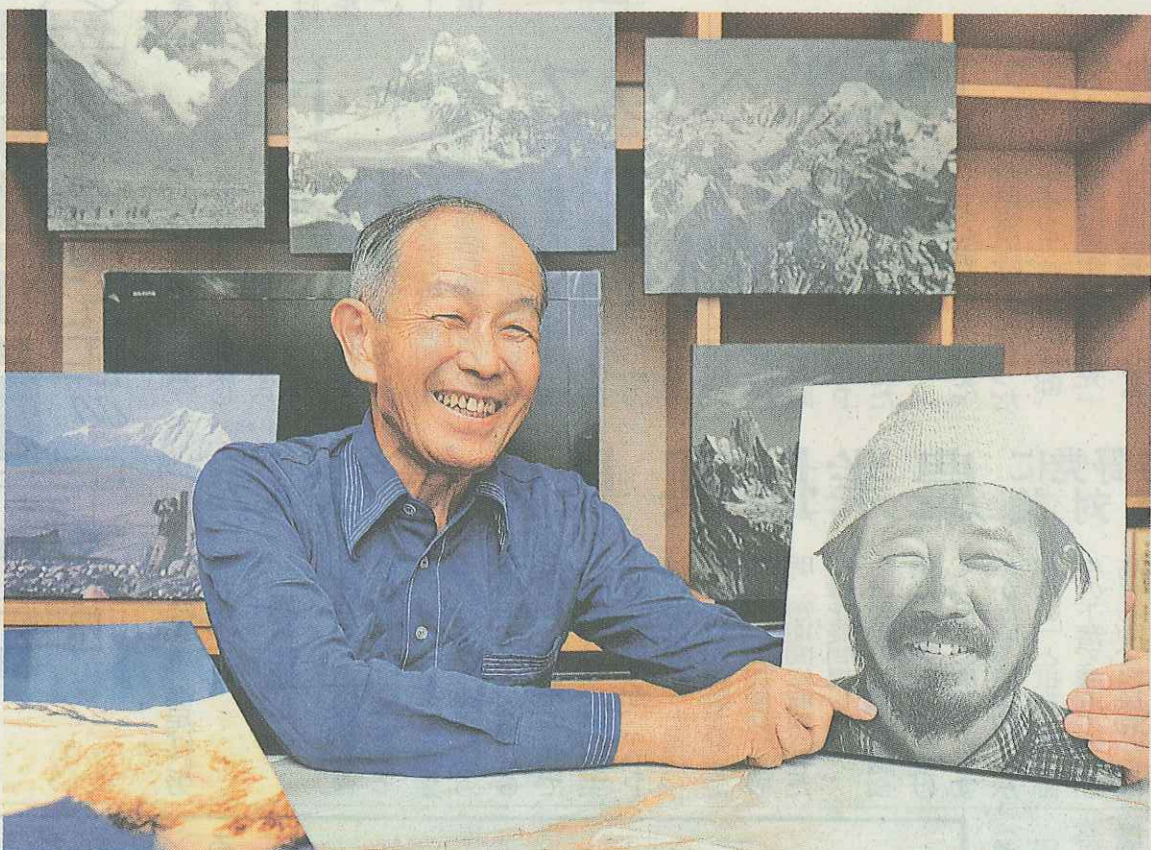
六甲山を抱く兵庫は、多くの探検家を育てた。芦屋で育ち、六甲山が「庭」だった地質学者の故郷田和夫。旧制第三高等学校(現京都大)時代から海外遠征を始め、自然人類学者の故郷西錦司や国立民族学博物館初代館長の故郷梅村忠夫らと、中国・大興安嶺やカラコルム山脈に挑んだ。



山本大貴さん



未踏峰ロブチンの山頂に立つ矢崎雅則さん。「音は何も聞こえない」。覆っていたガスが晴れ、青空が広がった(2009年11月7日、提供・神戸大学山岳会)



若いころの写真を手にする平井正一さん。隊員や隊長として制した未踏峰は4峰を数える＝京都市西京区(撮影・内田世紀)

新兵庫人輝く

第20部 岳人賛歌

題字は
牛丸好一さん

丹波市出身の関学大社会学部4年、山本大貴(24)「西宮市」は08年、もう1人の部員だった先輩と、ヒマラヤ山脈の未踏峰ティンジュンリ(6196m)に登頂した。

初めての海外遠征。不安と苦しみの中に、360度の絶景が待っていた。頂上では達成感と安堵感で、ふっと力が抜けた。下山後、また登りたくなった。「自然の中で、ステップアップしていける」。

それが山の魅力だと言う。

現部員は6人。来月3月、6千級のヒマラヤ山脈・パンフリに後輩を連れて挑戦する。卒業を控え、挑戦する理由は一つ。「伝統を引き継ぐために」

(敬称略)
(社会部・中島摩子)

